デジモンアドベンチャー　re:birth

ｋｚ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

デジモンが好きだった。デジタルワールドに心躍らせた。いつか自分も『選ばれし子供』としてパートナーデジモンとデジタルワールドを冒険する。そんな妄想をして、いつしかくだらないと諦めてしまった。

これはそんな大学生、宇津瀬京介とそのパートナーデジモンであるドラコモンの『再誕』へ至る冒険譚。

――今、冒険は再び生まれ変わる。

――という感じで進めていく予定です。

初めまして！　ｋｚ（かず）と申します。初投稿になりますが、デジモン好きの人にもそうでない人にも楽しんでいただける作品を提供できればと思います！

デジモンアドベンチャーと銘打っていますが、世界観は「デジモンクロニクル」の一部設定を取り入れた９５％オリジナルとなります。

オリジナルデジモンも登場予定です。そのあたりご了承いただければ幸いです。

目　次

プロローグ
プロローグ「宇津瀬京介という人物」――――――1
第一章「スクラップ砂漠」
第1話　「目覚めた場所は」――――――7
第2話「パートナー」――――――17

プロローグ

プロローグ「宇津瀬京介という人物」

宇津瀬京介（うつせきょうすけ）には一人の友人がいた。もう大学生になった今では名前すら定かではないが、確か「ゆうた」と呼んでいた気がする。

ゆうたとは小学3年生のころに同じクラスになったのが初めての出会いだった。

ゆうたはありていに言えば、変わった子供だった。

あまり人とは馴染まず、どこかぼんやりとしていて、昆虫と動物の図鑑が好きだった。

初めて声をかけたのも京介だった。

給食の後の掃除の時間が終わって、クラスメイト達が一斉にボールを持って教室を出ていく中、ゆうたは机の中からいつも読んでいる「世界の昆虫」という図鑑を取り出して読み始めた。

「それいつも読んでるね」

京介が話しかけると、ゆうたはまるで真横に雷が落ちたかのような反応で京介の方へ振り返った。

「俺はその中だとこいつが好きだな」

京介は図鑑に乗っている一匹のカブトムシを指さす。ゆうたは動揺しながらも、にへらと空気の中に溶けてしまいそうな儚げな笑みを浮かべる。

「ヘラクレスオオカブト。世界で一番大きなカブトムシだね」

「うん。知ってる。だから好きなんだ」

京介も笑う。京介も図鑑が好きだった。自分の知らない生き物たちの姿を見ると、世界にはこんなにもいろいろなものがあるのだとわくわくする。誕生日には必ず一冊の図鑑を買ってもらって、それを何度も何度も読み返すのが京介の好きなことの一つだった。

「ゆうたは何が好き？」

「ぼくは、これかな」

ゆうたは控えめに一匹の真っ黒なカブトムシを指さす。

「お、アトラスオオカブト！　かっこいいよなぁそれ！」
「うん。黒くて、大きくて、堂々としててすごくかっこいい」
「わかる！　でもヘラクレスの方がもっとかっこいい。こう、角がドーンって感じで」
「アトラスだって角がバーンって感じでかっこいいよ。しかもヘラクレスよりも本数が多いし」
　それから、京介とゆうたは二人でどちらの方がかっこよくて強いかを激論しあって、気づけば昼休みが終わる時間になっていた。
　それが、二人の初めての出会いだった。

「デジモン？」
「そう！」
　京介はカバンの中からデジモンカードの入ったケースを取り出す。
「俺好きなんだよね、デジモン。一番好きなのはウォーグレイモンだろ。あとデュークモンと、ムゲンドラモンとか、それからオメガモンはやっぱ外せないよなぁ」
「一番いっぱいだね……」
　ゆうたが苦笑いを浮かべながら順番に京介から差し出されるデジモンカードを受け取っていく。
「あ、かっこいい」
「だろ？　やっぱゆうたならわかってくれると思ってた！」
「これ、『メタルグレイモン』？　ていうの、かっこいいね」
「だろー!!　なぁなぁ、もしさ、デジタルワールドに行くとしたらパートナーデジモンはどれがいい？」
「パートナーデジモン？」
「一緒にデジタルワールドを冒険するパートナーだよ。俺はやっぱりアグモンかなぁ」
「そうだね。じゃあ僕は……」
　京介は自分の秘蔵のデジモンカードを次々にゆうたに見せ、ゆうたはそれを一枚一枚受け取りながら、京介のデジモン話を楽しそうに聞き続けた。

この日以来、ゆうたもデジモンにすっかりはまってしまい、二人でデジモンのゲームやカードを集めたり、お互いの好きなデジモンやアニメの話をして過ごすようになった。

ゆうたは親友だった。ゆうたといる時間はいつも楽しくて、幸せに溢れていた。ゆうたとの思い出を思い出すと、そこにはいつだって日だまりがある。暖かで、優しくて、安らかな日だまりが。

ゆうたと友達になって半年がたったころだった。

ゆうたが用事があるため先に玄関で待っていようと下駄箱に行ったときに、同じクラスの何人かがゆうたの靴箱の前で何かごそごそと怪しい動きをしているのを見つけた。

「何してんの？」

「!?　なんだ京介かよ」

クラスでもお調子者で通ってる男子が一瞬体をびくつかせた後、京介の顔を見て露骨なほどにほっとした表情を浮かべた。

男子の手にはセミの抜け殻があった。

「それ、どうすんの？」

「ゆうたの靴箱に入れんの。あいつ、虫好きだろ？」

そいつが顔を歪めてにやりと笑う。玄関から差し込む夕日の逆光も相まってか、いつも見ているクラスメイトの顔がまるで得体のしれない化け物のように見えて、京介は全身が総毛立つような悪寒を覚えた。

「先生には内緒な」

男子生徒はそう言って取り巻きと一緒に昇降口を出て行った。

京介は恐怖で何も言えないままその後ろ姿を見送り、しばらくしてからはっとしてゆうたの靴箱に駆け寄って開いた。

セミの抜け殻だけではなかった。枯葉や石ころ、それだけには飽き足らず、バッタや芋虫、ダンゴムシの死骸まで、ゆうたの靴の中にグチャグチャに詰め込まれていた。

吐き気がせり上がってきた。

何が起こっているか、京介には理解が出来なかった。これまで京介が生きてきた常識の中にはなかった惨状が目の前に広がっている。拒絶したい感情と、恐怖と、困惑とがないまぜになって、京介は慌ててゆうたの靴箱を閉じた。

呼吸が荒くなる。京介は片手を靴箱についたまま、乱れた息と心が落ち着くのを待った。

はあ、はあ、……んぐっ、……はあ、……う、……ぁぁ。

「大丈夫？」

ハッとして振り返る。ゆうたが心配そうな表情を浮かべてこちらを見ていた。

「……見たの？」

その言葉に、京介の胸には言いようのない罪悪感がぶわりと湧き上がってきた。見られてはいけないものを見られてしまったような、不自然な居心地の悪さ。

「あ、えっと、何が？」

「靴箱の中。見たんでしょ？」

とっさの誤魔化しもゆうたの言葉で封じられる。さぁっと血の気が引いていく感触。

「……全然！　な、何のことだろ？　それより、俺トイレ行きたくなってきちゃったから、ちょっと待ってて！　うんこだから時間かかるかも！」

そんなわけのわからないことを言いながら、京介は逃げるように下駄箱を後にして、トイレの個室の中に駆け込んだ。

最悪な気分だった。こみあげてきた吐き気はついに限界を迎えて、京介は便器に蹲って吐いた。

逃げ出した一瞬に見た、ゆうたの寂しげな表情が頭から離れなかった。

逃げ出した。俺は逃げ出したんだ。怖くて、情けなくて、泣きたくなる。口元を吐瀉物で汚したまま、京介は静かに嗚咽を漏らした。

それからも、京介は度々ゆうたのいじめられる現場を目にした。ゆ

うたは京介に何も言わないでいつも通りに接して、京介もまた何も見ていないかのように振舞った。それは、少なくとも優しさなんて言うたいそうなものではない、もっと矮小で、悍ましい感情故のもので、京介はそれを自覚し、自己嫌悪した。

どこかで変えなければならない。俺が動かなければこの状況は変わらない。俺がやらなきゃ、俺が。

半ば脅迫にも近い感情が京介の心中を埋め尽くすのに、そう時間はかからなかった。

木が枯れて、吹く風に冷たさを感じるようになったある日の帰りの会で、京介は手を挙げた。

「みんなに、言いたいことがあります」

＊

結果から言えば、いじめは終わらなかった。

表に出かかっていたものは京介の告発で再び影に身を潜めただけで、しかもその影は京介にまで手を伸ばし始めた。

京介の靴の中に無視の死骸が詰め込まれていたのを見たとき、京介は再びトイレで吐いた。

いじめはだんだんとエスカレートしていった。しかも皮肉なことに、京介へのいじめが苛烈になればなるほど、ゆうたへのいじめは次第に大人しくなっていった。

それでも、京介は前よりはずっとましだと感じていた。少なくともゆうたへのいじめはなくなってきている。自分が我慢すればいいだけだし、何より俺にはゆうたがいる。友達ならゆうたがいればいい。それ以外には何もいらない。

「急な話だが、ゆうた君とは今日でお別れになる」

突如、帰りの会で聞いた先生の言葉に、京介はしばらく頭が真っ白になった。

ゆうたは先生の横で申し訳なさそうな顔をして立っている。

なんで、なんでゆうたはこっちを見てくれないんだろう。なんでそ

んな表情をしてるんだよ。俺とは友達じゃなかったのか？　なんで黙ってたんだよ。どうして俺一人置いていくんだよ。どうして。どうして――。

そうして、京介は一人になった。

中学も、高校もずっと、誰の目にも止まらないようにひっそりと生きてきた。

ゆうたと必死になって集めたデジモンカードは中学に上がる時にまとめて捨ててしまった。

大学に進学してからは、京介は親元を離れて一人暮らしを始めた。

大学は京介にとって居心地がよかった。クラスなんてものは存在しないから、孤独でいようと思えばいくらでも孤独でいられた。

そうして京介は6畳一間のアパートで一人目を覚ます。

時計は6時半を指している。気だるげに体を起こし、洗面所で顔を洗い、歯を磨いてから服を着替える。七時になるまで適当にスマホでニュースを眺めて、時間になったら左手首に安物の腕時計を巻く。

そうして、玄関のドアノブに手をかけ、開いた瞬間。

世界は一変した。

第一章「スクラップ砂漠」

第1話　「目覚めた場所は」

瞬きの合間に世界が一変した。

午前7時5分、一瞬目の前が光に包まれたかと思うと、京介の視界は見慣れぬ天井を見上げていた。

体を包む柔らかく、温かい感触。足元に視線を動かすと、茶色の毛布が掛けられていた。どうやらここはベッドの上らしい。体を動かそうとすると、何故だか全身が軋むように痛い。

「!?　起きた!!」

突然の声にはっとして、ばね仕掛けのように聞こえた方へ顔を向けると、子供ほどの大きさをした緑色の恐竜のような生き物が、鼻が触れるかというほどの距離から京介の顔を覗き込んでいた。

「うわぁ!!」

驚いて跳ね起き、そのまま勢い余ってベッドから後ろ向きに転げ落ちた。

「大丈夫!?」

恐竜が京介に駆けよってくる。やばい、喰われる。パニックになった京介は、後頭部の痛みも忘れて転がるように恐竜から逃げ回った。

「待って！　待ってってば！」

「来るな来るな来るな!!」

床や壁で体をぶつけながらベッドの回りを逃げ回ること5周半。突然ドアがバタンと開き、真っ赤なテンガロンハットを被った銀髪の凶悪そうな男が隙間から顔を覗かせた。

「おーおー、寝起きから元気なこった。体調は大丈夫なのかい？」

人だ！　そう安心したのも束の間、男の全身が見えた瞬間京介の体は驚愕で凍りついてしまった。

深紅の甲冑に身を包んだ大男、首には蝙蝠の羽のようなマフラーをし、その両手は普通の人間のものではなく、猛禽の足のように鋭い三本の爪しかない。そして何よりも目を引いたのは巨大な銃身の形を

した両足。形は人間に近くても人間でないことは一目瞭然だった。
「あ、へ……」
　あまりの事態に声もでない京介を尻目に男は恐竜に話しかける。
「完全に固まってるじゃないか。一体何したんだ？　ドラコモン」
「僕は何もしてないよ！　京介が頭から落ちたから心配してただけ」
「だ、そうだけど。おたく大丈夫……じゃないようだな」
　大男はやれやれとため息をつくと、腰を抜かして動けない京介の前に立つ。
「まあ一回落ち着け。俺の名前はマグナキッドモン。宛もなくデジタルワールドを旅する流れのデジモンだ。旅の途中でお前さんが倒れているのと、その横でドラコモンが困ったようにうろうろしてるのを見つけてな。知り合いの家、つまりここまで運んできたんだ。ここまではよろしい？」
　疑問や恐怖、不安、そして何よりも困惑が頭を埋め尽くす。何から聞けばいいのか、まずこの状況を飲み込めていない京介にはそれすら浮かばない。
「やれやれ、こりゃ困った。おいドラコモン、こりゃどういうことだ？
　こいつは喋ることができないのか？」
「京介はこの世界に来たばかりだからね」
「……なるほど。そういうことは先に言ってくださらんかね。説明の仕方が変わってくるだろうに」
　マグナキッドモンは頭を掻きながら「そうさなぁ」と思案する。
「まず、ここがデジタルワールドって世界だってことは知ってるか？」
「デジタルワールド……」
　知っていた。小さいころにテレビでやっていたアニメの中にあった設定だ。自分たちの住む、「現実世界（リアルワールド）」とは別の、電脳空間に広がるもう一つの世界。そこではデジモンと呼ばれる生き物が暮らしており、主人公たち「選ばれし子供たち」はその世界を救うためにパートナーとなったデジモンと一緒に冒険し、成長していく。そういう物語だった。
「それは知っている。知っているけど……まさかここが？」

「おおそうかい。それなら話が早い。そうさ、ここがデジタルワールドだ」
「……ちょっと待って。理解が追い付かない」
　気が動転してきた。デジタルワールド？　ここが？　なんの冗談だ？　アニメは創作で、実際にあるわけがない。だが、目の前にいる大男と恐竜はそういう意味で見れば確かにデジモンにしか見えない。
（コスプレ？　いや、クオリティが高すぎる。ドラコモンなんてあの鱗はどう見ても爬虫類のそれだし）
「京介？」
　ドラコモンと呼ばれたデジモンは気を遣ってか、ベッドを挟んで反対側から顔だけを覗かして心配そうに京介の顔を見ている。見てくれはどう見ても狂暴な恐竜なのに、不思議とその表情を見ていると飼い主に見捨てられた子犬を見ているような気分になった。
「……大丈夫だよ。もう怖くは『京介―!!』うわ重い抱き着くな潰れる!!」
「さっきからどたどたとうるさいのよ!!　これ以上暴れるんだったら私の『アンソニー』が火を噴くわよ!!」
　バンと音を立ててドアが開く。
　中学生くらいの修道服を着た女の子が眉を吊り上げて立っていた。
「おお、ノワール。来たのか」
「マグナキッドモン、私はうるさいから静かにさせてきてって頼んだわよね？」
「ああ、だが俺は様子を見てくると言っただけで静かにさせるとは言ってないぜ」
「……あんたに任せた私がバカだったわ」
　ノワールと呼ばれた少女は、マグナキッドモンの屁理屈に相手にするのも無駄だと思ったのか、彼を無視して京介の方を向いた。
「目が覚めたみたいでよかったわ。私はシスタモンノワール。妹と区別するためにノワールと呼ばれているわ」
　名前からして彼女もデジモンなのだろうか。少なくとも服装は変わっているが見た目は人間に見える。とりあえずこれでようやく状

況が理解できそうだと、京介はほっと胸をなでおろした。

＊

ノワールの説明によると、このデジタルワールドは京介が昔アニメで見ていたデジタルワールドとは厳密には違うらしい。デジモンたちが住んでいる電脳世界というところは同じだが、アニメやゲームの中に存在したファイル島やフォルダ大陸という場所はこのデジタルワールドには存在していない。少なくともノワールやマグナキッドモンは聞いたことが無いそうだ。

「ここはスクラップ砂漠。身寄りのない流れ者が最後にたどり着くデジタルワールドの最果てよ」

少しだけ外を見せてもらうと、家の周りには見渡す限りの砂漠と、乾いた青空が広がっていた。家らしい家はノワールの家だけ。なぜかところどころに用途不明な電柱や標識が不気味に点在しており、それがかえって一層この場所の無味乾燥ぶりを際立たせていた。

「あんたが倒れていたのはこの場所から街道を一時間くらい歩いた場所だったわ。ドラコモンは京介が起きないって泣いてばっかで話にならなかったし、あと一歩マグナキッドモンが通るのが遅かったらあんたら砂漠の砂になってたわよ」

ノワールの言葉に、砂漠のど真ん中でミイラになる自分を想像してぞっと身震いする。

「そういえば、なんでドラコモンは俺の名前を知ってたんだ？」

「だって僕のパートナーだもん！」

「答えになってない。どこで俺の名前を教えてもらったのかって聞いてるんだ」

ドラコモンはほけっとした表情を浮かべた後、短い腕を体の前で合わせて（恐らく腕を組んでいる気になっているのだろう）思い出そうとうなっている。

「わかんない。でも教えてもらったんだ。ここに京介っていう人間が来るから、その人が君のパートナーになる人だって」

「誰から？」
「わかんない」
　頭を抱える京介。もしかしてドラコモンは自分に会う前の記憶を殆ど持っていないのではないか。だとしたらかなり厄介だ。ただでさえ状況を知る手掛かりが少ないというのに、肝心のパートナーデジモンが記憶喪失など、先行き不安にもほどがある。
　進展の無さそうなやり取りを見かねたノワールが、手をパンと叩いて場を仕切りなおす。
「まあ面倒な話はここまでにしておきましょう。いずれにせよこの世界で生きていくならどうしたって戦う力は必要だし、京介にとっても身を守ってもらう存在がいるのは心強いんじゃないの？」
　ドラコモンを見る。当の本人は任せろと言わんばかりに「えへん」と胸を張っているが、その自信は一体どこから出るのだろうか。現状信用できる要素が何もないだけに、ただただ頭が痛くなるだけだ。
「とりあえず今日のところはもう寝ておきなさい。明日からここでの生き方を教えてあげる。あとその腕についているデジヴァイスについてもね」
　そういわれて自分の手首を見ると、腕時計だと思っていたものは見たことない青と黒のメタリックなデザインのデバイスに変わっていた。デジヴァイスといえば、アニメではパートナーデジモンを進化させるために必要な道具だったはずだ。元々持っていた腕時計が無くなってデジヴァイスが腕に巻かれているということは、すり替えられたか、不思議な力で腕時計が変化したのだろうか。いずれにせよ安物だったから未練はないが、どうも釈然としない。なまじデジヴァイスが男心をくすぐるデザインをしているのが余計に複雑だった。
「今食事の準備をしてくるわ。大したものはないし、人間の口に合うかわからないけど」
　そう言ってからしばらく待つと、ノワールはコッペパンのようなパンと、茶色い汁に雑草のような葉っぱが浮いたスープを京介の前に並べた。見てくれは悪いし、入れてある器はカップだが、どう見ても味噌汁のように見えた。

（なぜパンと味噌汁？）
恐る恐るだけその味噌汁らしきスープを口に含む。旨味はなく、しょっぱさはあるが何か違う。頑張って味噌汁を再現しようとしたが、作り方がわからなくてとりあえず味だけ寄せてみたような、飲めないほどではないのだが、旨くはない。だけどなぜか懐かしさを感じる、そんな不思議な味だった。

＊

部屋に戻り、ぱたんとドアを閉めると、京介は大きなため息をついて壁に身を持たれながらへたり込んだ。
あまりにいろいろなことが唐突に起きすぎて、頭がパンク寸前だった。
それにしても、デジタルワールドときた。今朝までいつも通り大学に向かって代わり映えのしない一日を送ろうとしていた矢先にこれだ。おまけに聞けば2日も目を覚まさなかったらしい。道理で体が痛かったわけだ。
「……このまま帰れないとなると、単位やばいよな」
こんな状態になっても考えることが単位という自分に思わず自嘲する。デジタルワールド。デジモン。どちらも昔、まだ子供だった頃に京介があこがれた世界だ。それが２１歳になってすっかり忘れ去っていた今になって、その真っ只中に放り出されてしまった。今更どう受け入れろというのか、現実感が無さ過ぎて感情が追い付かない。
「単位って何？」
気が付くとドラコモンが京介の横で屈んでこちらを見ていた。独り言を聞かれていたことに少しだけ恥ずかしくなる。
「なんでもねぇよ。気にすんな。それよりも何か思い出したのか？」
「ううん。ごめんね」
「いや、いいよ。俺もいろいろありすぎて、正直これ以上何か新しい情報が出てきても受け止められる自信がない」

ドラコモンの頭をなでる。ひんやりとした鱗の感触が心地いい。ドラコモンは気持ちよさそうに目を細めている。見た目は恐竜なのに大型犬をなでているような気分だった。
「なぁ、ドラコモン」
「何？」
「なんで俺が選ばれたんだ？」
一番の疑問だった。どうして自分が選ばれたのだろうか。謙遜でもなく自分は何のとりえもない人間だ。特別な能力もないし、知識もない。人と馴染むのが苦手で、ずっと周囲から浮いていた。なんだかわからないけど、なぜかそこにいて、勝手に居心地悪そうにしている。それが周囲の宇津瀬京介という人間に対する評価だ。お世辞にもパッとしているとは言えない自分よりも、ずっと適任な人なんて他に山ほどいる。それとも、くじ引きのように全くの偶然で選ばれたのだろうか。それこそバカげた話だと京介は思う。
「わかんない。でも京介は僕のパートナーだよ」
ドラコモンの言葉に気遣いも疑いもない。ただ正直に、屈託なく、京介がパートナーだと言い切る。それがどうにも眩しく、鬱陶しかった。
当てつけのようにドラコモンの頭をぐりぐりとこね回す。
窓の外には黒曜石のように深い黒を湛えた夜空が広がっていた。こんな場所でも空の色は変わらないらしい。
立ち上がり、ベッドに体を横たえる。今日はもう寝てしまおう。そしてまた明日考えればいい。そう思っているうちに京介の意識はまどろみの中に静かに落ちていった。

＊

「おはよう。朝食を用意しておいたから早く食べなさい」
食卓を見ると、昨日と同じ味噌汁のようなスープが置いてあった。
「ありがとう。いただくよ」
「それ食べ終わったら外に来なさい。マグナキッドモンが特訓を付け

てくれるわよ」
「特訓？」
聞きなれない単語に首をかしげる。
「よかったわね。あいつ生き方は適当だけど強さは確かだから。ドラコモンはもう外にいるわ。パートナーがぼこぼこにされる前にさっさと行ったほうがいいわよ」
それを聞いた京介は急いで朝食を頬張ると外に飛び出した。

＊

遅かった。
「よう京介！　タイミングがいいな。ちょうどドラコモンの特訓が一区切り着いたところだ」
腰に手を当ててすがすがしい笑顔をうかべるマグナキッドモンの足元で、ドラコモンは目をぐるぐる回しながらへばっていた。
「ドラコモン！」
ドラコモンのもとへ駆け寄り、抱き起す。幸い傷は大したことはないみたいだ。
「勢いはいいが、それだけだな。まぁ成長期にしちゃ上出来だ」
悪びれもしないマグナキッドモンの言葉に沸々と怒りが沸き上がる。京介はマグナキッドモンを睨みつけた。
「お、いい視線だな。びりびりくるぜ」
「ドラコモンに何をした」
「なに、ちょっと小突いてやっただけさ。ほら、起きろよドラコモン。京介が来たぞ」
マグナキッドモンの声に、ドラコモンが呻きながら目を覚ます。
「ドラコモン、大丈夫か？」
「うん、ありがとう京介」
ドラコモンは重そうに体を起こすとぶるぶると顔を振った。
「やれるかい？」
「うん!!」

マグナキッドモンの問いかけに意気軒高にうなずく。
「だ、そうだパートナー。あんたはどうすんだ？」
京介は戸惑った。ドラコモンは完全にその気になっている。特訓だと言っていた。これで一体何が鍛えられるというのだろうか。京介の目にはただドラコモンががむしゃらにマグナキッドモンに向かっていって、何もできずにいいようにされるイメージしか浮かばない。そんなものが本当に特訓といえるのだろうか。疑心が心をめぐる。
その時、ふとドラコモンと目が合った。ドラコモンは意識を前に向けながらも、視線は京介の方に向いていた。一緒に闘ってくれることを一切疑っていない無垢な視線。きっと理屈なんてはなから頭にないのだろう。まるっきり子供だ。いや、下手したら子供以上に純粋だ。その純粋さがきっとドラコモンの強さなのだろう。そんな視線を裏切れるほど、京介の心は強くなかった。
「わかった。やるよ」
ドラコモンの目に闘気が宿った気がした。マグナキッドモンは口の端を吊り上げ凶悪に笑う。
「よく言った。それでこそ『選ばれし子供』だ」
「もう子供じゃない。で、具体的にどうすればいい？」
「俺に一撃加える。それが課題だ。簡単だろ？」
マグナキッドモンは両手を広げて二人を挑発する。
「ドラコモン！」
「おう！」
京介の掛け声に呼応してドラコモンがマグナキッドモンに襲い掛かる。渾身のテイルスイングは、しかしあっけなくマグナキッドモンに躱される。だが、京介の狙いはそれではなかった。ドラコモンの一撃に隠れるように小石を拾い上げると、死角からマグナキッドモンめがけて投擲した。
「……まぁ、当たればいいくらいに考えてたけど、さすがに無理か」
「不意を打とうって発想は嫌いじゃないけどな」
京介が投げた小石はマグナキッドモンの手の中で握りつぶされ、砂

となって風に舞う。

こうして、京介とドラコモンの特訓が始まった。

第2話「パートナー」

「ストップ！　いったんストップ!!」
　息も絶え絶えになってドラコモンを制止する。
　無理だ。無理だこれ。正面から、背後から、2方向から、不意打ち、範囲攻撃、思いつく限りの方法を試したがまるで当たる気がしない。
「お、降参か？」
　マグナキッドモンはにやにやと茶化すように笑う。あれはバカにしている顔だ。殴り飛ばしてやりたくなるが、物理的にできないのでぎりぎりと歯噛みする。
「うるさい！　ちょっと待ってろ！」
　やけくそ気味に怒鳴り、ドラコモンを引き連れてマグナキッドモンから距離をとる。
　どうすればいい。マグナキッドモンは強い。ドラコモンと京介では手も足も出ないくらいの実力差がある。少なくとも完全体以上の力はあるのだろう。事実、この一時間、マグナキッドモンは攻撃を避けるばかりか反撃を一切していない。それはつまり反撃をする必要がないくらい余裕があるということだ。
「京介？」
「ん？　ああ、ごめんドラコモン。考え事をしていた」
　とにかくいったん仕切りなおそう。悔しいが今の俺たちじゃどうしようもない。
　ドラコモンを置いて、京介はマグナキッドモンのもとへ戻る。
「マグナキッドモン」
「なんだ？」
「時間がほしい」
「ちょっと待ってよ京介！」
　京介の言葉にドラコモンが食って掛かる。
「京介は諦めるの!?」
「諦めるんじゃない。一度退くだけだ。時間がいる」
「そんなのいらない！　京介と二人だったらできるよ！」

その言葉を聞いた瞬間、頭の中で何かがぷつんと切れた気がした。こいつは一体俺の何を知って、こんな根拠のないことを言うのだろうか。逃げるわけじゃない。ただ方法を考えるだけだ。それの何が不満なのか。

頭に血が上った京介はドラコモンを無視して家に戻ろうとする。

「京介!! どこ行くの!! まだ戦いは終わってないよ!!」

「そうだぜ京介。俺は時間をやるなんて言ってない」

立ち止まって、振り返る。

「そうだな。1日だけくれてやってもいいが、条件がある」

「……なんだよ」

「ドラコモンと話し合う事」

「……必要ない」

「必要あるかどうかは関係ない。俺が決めた条件だ。それができないなら今すぐ特訓続行だな。今度は俺の小銃が火を噴くかもだぜ?」

「パンパン」とマグナキッドモンは手で銃の形(と言っても指が三本しかないため銃のようには見えないのだが)にして冗談めかす。苛立ちを抑えるために握りしめた手は真っ白になっていた。

「……わかった。ドラコモン、来い」

「京介……」

「いいから来い!」

京介の怒鳴り声にびくりとドラコモンは体をびくつかせて、恐る恐るついてくる。背中越しに聞こえる足音が、京介にはたまらなく耳障りだった。

＊

「なかなか骨が折れそうね」

家の中に入っていった京介とドラコモンの背中を見送り、ノワールが呆れたようにマグナキッドモンへ話しかける。

「そうか? 俺は結構好きだぜ。ああいうやつは。闘争心メラメラで見ていて心地がいい」

「あんたがそういうのならいいんだけど。見込みはありそうなの？」
「さてな」
　マグナキッドモンはどこか遠くを眺めるように、二人の去っていった方を見ていた。
「思い出してたの？」
「まあな」
「そう。面影が重なるのかしら？　私は似てないと思うけど」
「俺もそう思うよ」
　「ただな」とマグナキッドモンははにかみながら続ける。
「眩しいのさ。ああいう関係を見ているとな。胸の奥のなんかよくわからねぇ部分をきゅっと締め付けられているような、そんな気分になるんだよ」
　ノワールは横目にマグナキッドモンの双眸をみる。その瞳はきっとこの景色ではない、ずっと昔にあった忘れることのできない光景を見ているのだろう。
「見た目によらず義理堅いわよね、あんた。もう何年前の話よ」
「何年前だって関係ない。『選ばれし子供』は俺の恩人だ。恩は返さねぇとだろ？」
　「あと見た目によらずは余計だっつーの」とノワールの頭を小突く。ノワールはそれを鬱陶しそうに振り払った。
「ああ、そういえば伝え忘れてたけど、最果ての町で〝感染者〟が出たわ」
「感染者」という言葉に、マグナキッドモンの表情は一転して苦々しいものへと変わる。
「こんなところにまで出たのか」
「そこまで不思議なことじゃないわよ。ここは世界から爪弾きにされたものが集まる場所だもの。これまでは私とブランで感染者が入らないようにしていたけど、それにだって限界はある。遅かれ早かれこうなることは分かってた」
「感染したやつはどうしたんだ？」
「私が殺した。ブランにそういうことはさせられないし」

「……そうか」
「なに？　私が気に病むとでも思ってんの？」
「そんな繊細なタマじゃねえだろ」
「失礼」
　ノワールがマグナキッドモンの脇腹を小突く。マグナキッドモンはへへっと笑ってそれを受け入れた。
「京介がこの世界に呼ばれたのって、そういうことよね？」
「だろうな」
「……やっぱり、このシステム嫌いだわ。私たちの問題を他所の関係ない人間に押し付けてるみたいで」

　ノワールを見下ろす。マグナキッドモンの腰ほどしかない彼女は、憮然とした表情で腕を組んでいる。彼女の怒りはいつだって優しいのだ。マグナキッドモンはそれを知っているし、だからこの場所に帰ってくる。彼女がその優しさに潰されないように。本人には絶対に言わないが。彼女は天邪鬼だから、そんな気持ちはきっと聞きたくないはずだ。
「だから、俺たちみたいなのがいるんだろ？」
「ふん」
　彼女は鼻を鳴らして、家の方へ足取り荒く歩いていく。
「食事の準備をしてくるわ」
　玄関へ入っていくノワールの背中を見送って、マグナキッドモンは笑う。
「やっぱり、お前は優しい奴だよ」

＊

「京介！　部屋に入れてよ！　ねぇ！」
　ドア越しに響くドラコモンの声を無視する。
　腹の奥から吐き気に似た気持ちの悪い感情がぐつぐつとこみあげてくる。

わかっている。これはただの八つ当たりだ。ドラコモンに落ち度はなかった。悪いのは感情に振り回されている自分自身だ。だというのに、ドラコモンの声を聞けば聞くほどに湧き出てくる苛立ちに振り回されて、冷静になることができない。

「ねぇ京介！　京介ってば！　京介！」

ドラコモンがどんどんとドアを叩く。ドアにもたれているため背中にダイレクトに伝わる衝撃が鬱陶しい。

どんどん!!

どんどん!!

どんどん!!

どんどんどんどんどんどんどんどんどんどん――……、

「……ああ、もう!!」

ついに我慢できなくなって立ち上がり、ドアを思いっきり開けた。

「おわぁ!!」

ドラコモンは急にドアが開いたことでバランスを崩し、そのまま前のめりに転ぶ。

「えへへ、京介。やっと開けてくれた」

ドラコモンが倒れたまま京介を見上げて、笑いかける。

そうだ。これだ。この笑顔だ。この裏切られることないなんて万に一つも考えていないこの笑顔が、たまらなく癇に障るのだ。

人は裏切る。どんなに仲が良くても、信頼してても、約束を交わしても、必ずいつか裏切る。そして、裏切ったことを裏切った側は正当化する。自分を守るために。傷つかないために。「仕方なかった」なんて言い訳をして。だから俺はずっと一人で生きてきたんだ。裏切られるのは怖いから。痛いから。

だというのに、こいつは、この純粋さの塊のような生き物は、そんな京介の考えなんてまるっきり無視して土足で心の中に踏み込んで来ようとする。

「……おまえ、もう一回出てけよ」

「なんで!?」

ドラコモンは目をウルウルさせながら京介にすり寄ってくる。一瞬毒気を抜かれそうになるが、顔を逸らすことで何とか踏みとどまった。
「ねぇ京介」
「……なんだよ」
「さっきはごめんね」
「……は？」
思わず逸らした顔を元に戻した。なんでドラコモンが謝るんだ？
何に対して？
「僕ね、どうしても勝ちたかったんだ。でも、京介はもう戦いたくなかったんだよね」
思考がフリーズする。戦いたくなかった？　俺が？
「……ちょっと待ってくれ。なんでそうなるんだ？」
「だって、戦いたくなかったから時間が欲しいって言ったんでしょ？」
「ちがう。俺は作戦を立てる時間が欲しかったから、マグナキッドモンと交渉しただけだ。戦いたくないわけじゃない」
「え？　そうなの？」
ドラコモンの表情に困惑が浮かぶ。
「だって、マグナキッドモンが条件をのまないと特訓を続けるって言ったら、京介わかったって言ったじゃん。あれって戦いたくなかったからわかったって言ったんでしょ？」
ドラコモンの問いかけに、京介はそういえば一度もドラコモンに戦いを中断した理由を伝えていなかったことに気づく。
「……ああ、えっと」
しょんぼりと肩を落とすドラコモンを見下ろしながら、京介は所在無さげに頭を掻いた。
謝る、ほうがいいのだろうか。人とのコミュニケーションを避け続けてきたために、こういう時の対処法がわからない。……いや、それは言い訳だ。ただ心の踏ん切りがつかないだけだ。時間が経てば経つほど、ドラコモンの体が小さくなっていくような錯覚を覚えて、居心地の悪い気分になる。

「ドラコモン」
「？　何、京介？」
「その、あー、えっと……」
　言え。さっさと言え。畜生、喉が詰まって声が出ない。なんでドラコモンはあんなにさらっと謝れたんだ。謝るの難しすぎるだろ！
　そのとき、すっとドラコモンが京介の手を握った。
「大丈夫？　京介」
「――っ」
　……何故だろう。さっきからおかしいことばかりだ。なんで今、俺は泣きそうになってしまったのだろう。ただ手を握られただけなのに、どうしてこんなにも感情が揺さぶられるのだろう。
「……なんで、お前はそんなに俺のことを信じられるんだ？」
　絞り出すように、京介が問いかける。不思議だった。ドラコモンの信頼が一体どこからくるのか、何をもって俺なんかをパートナーとして認めているのか。
　何て答える？　京介の不安を他所に、ドラコモンはまるで当たり前のことを聞かれたかのように不思議な顔をして、
「？　だって、京介は僕のパートナーだからね」
「……答えになってねぇよ。バカ」
「……京介、泣いてるの？」
「泣いてねぇ」
「京介？」
「バカ」
「なんで!?」
　ドラコモンの突っ込みは無視して、京介は静かに涙を落とした。その様子をドラコモンは京介が泣き終わるまで手を握りながら心配そうに見つめ続けていた。
「……ドラコモン」
「何？　京介」
「ごめんな」

「うん。僕もごめんね」
そんなやり取りが、どうにもむずがゆくて、ドラコモンと京介はどちらともなくへへへと笑いあった。

＊

気恥ずかしさで死にそうだった。手を握られただけで泣くとか、普段一体どれだけ温もりに飢えているのだろう。もう一生引きこもって誰にも会いたくない。
「もう手は握らないの？」
「やかましい！　次言ったらぶっ飛ばすぞ！」
「えへへ、京介照れてる！」
こいつ、調子乗ってやがる……！
いろいろと言ってやりたくなったが、ひとまず頭を切り替えることにする。今は昼過ぎ、日が沈むまで恐らく3時間くらいか。いざとなれば日が沈んでからも練習はできるが、知らない場所で夜中に外にいるのはあまり得策ではないだろう。とにかく動ける場所に行こうと考え、ドラコモンと京介は家の裏手に出て作戦を練ることにした。
「まずはドラコモンに何が出来るか、それを教えてほしい」
できることとできないことがわからなければ作戦も考えようがない。さっきの戦いでドラコモンが出した技はある程度は記憶している。
最も印象に残っている攻撃は火炎弾。口から直径３０センチほどの火の玉を吐き出す技だ。当たったところが爆発しているのを見る限り、ただの火の塊というわけでもないらしい。おそらくドラコモンの最も強い攻撃だろう。
次にテイルスイング。直接攻撃だとこれがメインになる。一撃の威力は当たってないので図りようがないが、ドラコモン自身の話だと砂漠に立っている電柱くらいならへし折れるらしい。何それ怖い。
あとは噛みつき、体当たりくらいだろうか。いずれも前者二つに比べれば決定打にはなりにくいが、今回に限って言えば当てれば勝ち

だ。生かす方法もあるかもしれない。
　ドラコモンの足の速さは京介とほとんど変わらないか、少し早いくらいだった。パワーはドラコモンの圧勝。
「正面突破はどう考えても不可能だ。可能性があるとしたら不意を突くこと。ただ、どうやって隙を作る？」
「隙……、弱点を突く、とか？」
「弱点って言ってもなぁ……」
　おおよそ見ている限り、弱点らしいところなんて見つからなかった。或いは、それすら見つけられないほどに実力差があると考えた方が自然だろう。
「ドラコモンは何か気づいたことは」
「すっごく強かった！」
「……ああそう」
　やめよう。ドラコモンと話すとバカになりそうだ。
「そういえば、ドラコモンには何か弱点とかあるのか？　例えば、ここを攻撃されると嫌だって思う場所とか」
「僕？　そうだなぁ。弱点じゃないけど、僕はここを触られるのは嫌かな」
　そういってドラコモンは小さい腕で後ろの方を指す。
「背中か？」
「うん。羽の間のところ。そこ触られると目の前が真っ白になって――」
「あ、この鱗だけなんか向きが逆だな」
　ドラコモンの話を最後まで聞かないまま、何の気なしに京介は一枚だけ逆向きについている鱗に触れた。
「あっ！　――」
　直後だった。ドラコモンの目が真っ白になったかと思うと、頭の角が真っ赤に光りだす。やばいと京介が本能的に身を離した瞬間、ドラコモンの口から轟っ!!　という爆音とともに超高温の熱線が放たれ、砂漠を一直線に切り裂いた。
「……はっ！」

ドラコモンが意識を取り戻す。熱線が走った場所は砂が熱と爆風で消し飛び、深い溝になってしまっていた。直線上にあった電信柱や標識は焼き切られ、切断面は赤熱している。目の前の光景が熱線の温度が尋常でないことをこれでもかと物語っていた。
「すげぇ……」
京介は尻もちをついて放心することしかできない。
「京介、背中の鱗触ったでしょ？」
「へ、お、おう」
「ここ触られると意識が飛んで、気が付くと目の前が大変なことになってるんだ。だから触らないでって言おうとしたのに……」
「そ、そうか。すまん」
そういえば、竜には逆鱗と呼ばれる鱗があると聞いたことがあるが、これがドラコモンにとっての逆鱗なのだろうか。伝承だと確か顎の下だったはずだが。
だが、これは大きな収穫だ。発動するまでにややラグはあるが、うまく使えばマグナキッドモンを動揺させ、隙を産み出すことが可能かもしれない。
「ドラコモン」
「嫌だ」
「まだ何も言ってないんだけど」
「戦ってるときに触るつもりでしょ？　あれ自分でどうなってるか分からなくなるから嫌」
「そこをどうにか！」
「いーやーだー!!」
押し問答の末、一発だけならと許可を貰うことに成功する。ドラコモンには申し訳ないが、これで勝つための算段がたった。京介は考えた作戦内容をドラコモンに伝えた。
「ーーって感じで行く。やれそうか？」
ドラコモンが頷く。
「よし。二人であの余裕面をぶち壊すぞ！」
「うん！」